ら

国語問題

はじめに、これを読むこと。

1. この問題用紙は十三ページある。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し、確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に記述すること。
5. 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもＨＢ・黒)で記入すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定の欄以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. **解答用紙は、持ち帰らないこと。**
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. 試験時間は、六〇分である。
12. 解答をマークする場合は、下の記入例を参照して、正しくマークすること。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
●	◉ ⊗ ○

一

次の文章は、日本の伝統的社会をモデルにした「全体共同体」型社会について述べたものである。これを読んで、後の問に答えよ。

社会集団が全体として成員のさまざまな資格の相違を**カエリ**(ア)みずに全員をそのまま受け入れるとなると、全体の統一の問題が生じてくる。互いに異なった者たちが一つに集まってみても、孤立した者たちが単に集まっているだけでは、社会集団を形成しているとは言えないのではないかという問題がある。「場」が一つの空間のようであるとして、それが雑多な者たちをそのまま受け入れるということしか意味しないのであれば、社会集団形成の条件として不十分である。では何が社会集団の形成の条件になっているのか。

「場」が一つの空間のようであることには、「場」にいる者たちをそのまま受け入れるという意味の他に、「場」にいる者たちは成員であるためにはそこから出ることができないという意味がある。「場」を離れてしまうと、集団の外に出てしまうことになる。「いつも一緒」でなければならない。

この場合、①「場」は越えることのできない枠のようなものである。「場」にいることだけがその社会集団の成員であることの条件なのだが、それはとりもなおさずその「場」にいるのでなければ成員であり続けることができないということも意味している。

この越えることのできない枠の中に、あらゆる種類の者が成員として受け入れられている。そしてすべての成員がこの中で生活することを求められる。彼らはこの枠の中にいわば［　I　］人のように留まることになる。

このように閉じた枠の中で他の人と生活する者は、何らかの行動が自分に意義が認められるからといって、それだけの理由で他者に対してその結果を強制することができないということになる。

この状況を社会集団全体のレベルで見るならば、社会集団はさまざまな資格を持つ者をその内部に無限に受け入れるのだから、内部にいる各人の論理の自由な行使は全体の調和を乱す要因として抑制されねばならないということになる。同じ状況を

成員の各人のレベルで見るならば、自分を主張することよりも、他のすべての成員のさまざまなあり方を受け入れることのほうを求められているということになる。各人がそれぞれ勝手に自分の論理を他者に強制するようなことは、控えるべきことされる。他の者にも同様な抑制力が働いている。

しかし本来的に異なる人々が集まっているのだから、さまざまな軋轢[a]が生じることは避け難い。けれども対立を孕[b]むそのような事態に対して、各人が自分の論理を対置させて対抗するというようなことは避けるべきである。

「場」の原則による社会集団においては、自分を取り巻くさまざまな人々の多様なあり方をありのままに認識して、それらに自分の論理に従って一つ一つ対応することには、自ずと限界がある。他者の多様なあり方に論理的・理性的に対応しようとすることには、大きな困難が伴うからである。他者について肯定的に対応できる場合は自ずと限られており、否定的な対応が帰結するべきような場合にはそれを表明することは抑制されている。しかも同じ集団にありながら対立的になりかねないような者から遠ざかることも、これは「場」から**シリゾ**[イ]くことを意味するのであるから、避けなければならない。

したがって多くの場合において「耐える」「忍ぶ」ということ以外に選択の余地がなくなってしまう。肯定的な関係を維持するために、耐え難い他者に耐えねばならない。全体の「和」のためにひたすら「忍ぶ」[A]ことが求められることになる。

しかし、忍耐力にも限度がある。耐えられないことは、やはり耐えられない。言い換えれば、こうした人間関係は他者との対立を前提とする論理的ないし理性的なレベルでの処理によっては維持することが困難であるということになる。とすれば、耐えるということが必要にならないように、状況への対処のあり方を変更するしかない。論理的ないし理性的な局面での諸問題を無視して他者を肯定的に評価できるようになればよいのである。他者との対立を前提とするような立場からは他者との相違をすべて肯定的に評価できないのであれば、②他者との対立を前提としない立場に立つことができればよいことになる。

それは、他者は対立するものではないと前提する立場であり、つまり自分と他者は「一体」であるとする立場である。それは、「私」が「あなた」と対立することを前提とする立場ではなく、「私」は実は「あなた」と一体だ、つまり「私」も「あなた」も実は「私たち」だとする立場である。

こうした立場においては「私」は「あなた」に対立する「私」ではなく、B「あなた」の「あなた」になろうとする。「あなた」が、「私たち」の一員としての「私」にどのようであることを望むかを見極めて、そのようになろうと努力をすることになる。

それでも軋轢は生じるかもしれない。しかしそれは「あなた」が「私」の論理に従わないことに理由があるのではない。「私たち」全体の問題であると見なされねばならない。成員のあり方については常に肯定的な評価を与えられねばならない。誰もが「良い人」である。つまり、「私たち」になろうとしている。そして必ずしもウ**カンペキ**にはならない結果よりも、「私たち」になろうとする各人の努力、あるいはそうした努力をしようとする内面的態度が評価される。誰もが「一生懸命やっている」。

「場」という外的な強い枠組みを越えることができないという客観的現実を成員が受け入れなければならないために、成員の間の対立的な関係が基本的に存在し得ず、全体が一体でなければならなくなり、Cその状況が内面化されている。全体が一体であるという現実は、全体が一つを成しているという内面的な感覚ないし確信においても存在している。しかしこの「私たち」という関係は、成員各人が自分の自由や好みによって選択するのではなく、社会の「場」の原則によって強制される。ここには③「個人」の自立や自由の存在する余地がない。

しかし社会集団のこうしたあり方が、D成員たちにとって苦しいものであるばかりとは限らない。「場」の原則による社会集団は成員の生活全体の枠になっている。

「 Ⅱ 」でなければならないのだから、ある者が自分の集団以外の集団に同時に属するということは不可能である。とすれば、自分の集団で生活の必要の一部分しか満たされないのでは不都合である。各成員の生活におけるすべての必要が、この集団の「場」の枠内で満足されなければならない。そして自分の集団で自分の生活におけるすべての必要が満たされるのならば、他の集団に属する必要もなくなってしまう。したがってこのようなタイプの社会における各人の集団への帰属は一義的で単純である。この「帰属の一義性」は社会的に強制されたものでもあり、また各人の生活において必要な論理の自然な帰結でもある。

しかし集団への帰属が一義的であるということは、ある集団の成員であるという事態が続きさえすれば、あとは自動的に生

活全体が成り立っていくことを意味する。一度一つの集団に属してしまえば、死ぬまで自分の生活のすべての必要が満たされる。「場」の原則による社会集団は成員にとって天国のようなものであると言うこともできることになる。複雑な社会関係を絶えず制御していかなければ生活が成り立たないような状況に比べると、④たいへん負担の少ない生活が約束されていると言うことができる。

（加藤隆『武器としての社会類型論』より）

問一　傍線ア「**カエリ**（み）」、傍線イ「**シリゾ**（く）」、傍線ウ「**カンペキ**」をそれぞれ漢字に改めて記せ。

問二　傍線a「軋轢」、傍線b「孕（む）」の漢字の読みをそれぞれひらがなで記せ。

問三　［　Ⅰ　］にあてはまる語を次の中から選び出して、その番号をマークせよ。

①　とらわれた　②　えらばれた　③　ぬすまれた　④　みせられた

問四　［　Ⅱ　］にあてはまる表現を次の中から選び出して、その番号をマークせよ。

①　良い人　②　帰属の一義性　③　いつも一緒　④　一生懸命やっている

問五　傍線A「忍ぶ」という対処法の性格を説明したものとして最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 「忍ぶ」は、論理的または理性的な関係をこわす、人間関係への対処である。
② 「忍ぶ」は、論理的ないし理性的な抑制をすてた、人間関係への対処である。
③ 「忍ぶ」は、論理的または理性的な局面をめざす、人間関係への対処である。
④ 「忍ぶ」は、論理的ないし理性的な対立をさけた、人間関係への対処である。

問六　傍線B「「あなた」の「あなた」になろうとする」を説明したものとして最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 「あなた」が求める「あなた」像にふさわしい「私」になろうとする。
② 「あなた」らしい「あなた」像にみあうような「私」になろうとする。
③ 「あなた」と対等な「あなた」像につながった「私」になろうとする。
④ 「あなた」から見た「あなた」像につり合う「私」になろうとする。

問七　傍線C「その状況が内面化されている」を説明したものとして最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 成員はそれぞれ一生懸命やっているという実感と満足感が、成員の心中にきざまれたものとなっている。
② 成員同士が対立せずに一つになっているという感覚が、成員各人にとって実に自然なものとなっている。
③ 成員はみな「場」の枠を超えることができないのだという現実が、嫌というほど身にしみたものとなっている。
④ 成員各人はみな「私たち」になろうという態度を心の中に抱き、常に努力をおこたらない状態となっている。

問八　傍線D「成員たちにとって苦しいものであるばかりとは限らない」とあるが、その理由を説明した三十九字の箇所（句読点を含む）を本文中より探し、その最初と最後の五文字を記せ。

問九　二重傍線「何が社会集団の形成の条件になっているのか」への答えとなっている、本文中の箇所として最も適切なものを、波線を付した箇所から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 「場」は越えることのできない枠のようなものである
② 他者との対立を前提としない立場に立つ
③ 「個人」の自立や自由の存在する余地がない
④ たいへん負担の少ない生活が約束されている

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（一部本文や表記を改めた箇所がある）

むかし、汝南の人、田の中に網をまうけて、くじかをとらんとす。やがて、くじかかかりけれど、その網の主いまだ来らざりしに、道ゆく人のあるがくじかをば盗みてけり。さりとも、人のとりえたらむものを、[1]あやなくとりなんも罪深しと思ひて、そのくじかのかはりに、携へ持ちし鮑魚ひとつを、網の中に入れて行き去りたる程に、かの網の主来りて、鮑魚の網の中にあるを見て、このものここにあるべしともおぼえず、いかさまにも現神のあらはれさせ給ふに［Ⅰ］あめれ、と大いに[A]あやしむ。村の者ども皆より集まりて、やがて祠を建て入れ参らせ、鮑君と名付け参らせけり。村の者ども、病さまざま癒ゆることあれば、この御神のめぐみによりし所なりとていつきまつるほどに、御社大きに作り出して、かへりことまうしの神楽の音絶ゆることなし。まことに［Ⅱ］御神にぞありける。七、八年ほど経て、かの鮑魚の主この御社のほとりすぎて、いかなる御神のかくはあらはれさせ給ふらむといふに、おのがとどめ置きし鮑魚なりけり。[2]あなあさまし、それはみづからがとどめおきし物を、といひければ、かの霊験の事どもたちまち止みにけり。

また、芦浦といふ所を過ぎし人の、なにとなくわらぐつをとりて樹の枝にかけて過ぐ。後より来れる人、またわらぐつをはじめ過ぎし人のごとくに掛く。ここを過ぐる人、皆かくのごとくするほどに、後にはわらぐつの員（かず）、幾百千といふことをしらず。何者のたはむれにか、草鞋大王と名を題して後には、竟（つひ）に御社をたてていつきまつるほどに、霊異はなはだあらはる。彼の、はじめわらぐつかけたりし人ここを過ぐるに、そのよしを聞きて［Ⅲ］事に思ふ。まことは、この所の古武士（ふるつはもの）の死せしその魂のよりにしにぞありける。『老子』の「道をもつて世を治むるときは、その鬼、神ならず」と言へること、[B]これらの事をや言ふべき。

南軒張氏の、一つの淫祠をこぼたれしところ、その神に牒するの文書きて、一人の司戸をその使に差しけるが、この司戸その牒を受くるに、両脚たちまちに萎えてけり。されども輿（こし）にたすけ乗せられて行く。かの祠に入りて、その神の像をとりてうち割るに、その腹の中に箱あり。世に香箱のごときものなり。箱の内に箱あること数重の後に、小さき箱の中より、大きなる

白き虫の走り出るを取りて、油に入れて煎殺しつ。両脚の萎えし、たちどころに癒えてけり。この類また世に多し。はじめ神仏の像作り出すに、僧道巫祝のたぐひ、虫蛇の類のその性極めて霊なるをとりて、像の中に籠め置きて、その霊をたすくる事あるものなり。思ふに、かの司戸が両脚の萎えしは、深くかの神を畏るる心のいたす所なり。虫を見るに及びて、まことに神明には勝りしと思ふ心付くぞ、たちどころには癒えたり。

（新井白石『鬼神論』より）

（注）汝南 ―― 中国河南省汝南県。　くじか ―― シカ科の小動物。森や草原に住む。　鮑魚 ―― あわび。
かへりことまうし ―― 神から受けた恩恵に報いるために祭ること。　芦浦 ―― 中国浙江省の地名。
南軒張氏 ―― 張栻（南軒）（一一三三～一一八〇）。南宋の儒学者・政治家。
淫祠 ―― いかがわしいものを祭った祠。　牒するの文 ―― 奏上する文。牒は公文書。
司戸 ―― 下級役人。　僧道 ―― 僧侶と道士。　巫祝 ―― 神事をつかさどる者。神官や巫女など。

問一　傍線1・2を口語訳せよ。

1　あやなくとりなんも

2　あなあさまし

問二　傍線A「大いにあやしむ」とあるが、そもそもなぜそのようにあやしむことになったのか。次の中から最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① くじかを捕ろうとして仕掛けた網にあわびがかかり、だれかにだまされているのではと疑ったから。
② 陸の動物であるくじかを捕るための網に、海の生き物のあわびがかかるのは道理に反しているから。
③ 陸の動物であるくじかが、海の生き物であるあわびに変化したのは、神頼みのお陰だと思ったから。
④ くじかを盗まれたかわりにあわびが出現したくらいでは、神の霊験としては物足らなく思ったから。

問三　空欄 Ⅰ に入る助詞を、ひらがな二文字以内で記せ。

問四　空欄 Ⅱ ・ Ⅲ に入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① Ⅱ―あやしき　Ⅲ―かしこき
② Ⅱ―めづらしき　Ⅲ―おそろしき
③ Ⅱ―いちはやき　Ⅲ―うとましき
④ Ⅱ―めでたき　Ⅲ―をかしき

問五　『老子』の「道をもつて世を治むるときは、その鬼、神ならず」という言葉をうけて、傍線Bで「これらの事をや言ふべき」と述べているが、その意味するところとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 道理を無理に通して世の中を統治しようとすると、あわびの神やわらぐつ大王のような神々が萎縮してしまい、その恩恵を受けられなくなるということ。

② 道理を貫く理性的な少数の人々は、世の中がどうであれ、あわびやわらぐつなどにも霊魂が宿ると考えるような迷妄をうち払うことができるということ。

③ 道理が支配する世の中で、人々が理性的であれば、あわびの神やわらぐつ大王のような怪しげな神は、もはやその霊力を保つことができないということ。

④ 道理や理性のみで世の中が成り立つという考え方が蔓延すると、あわびやわらぐつなどにも宿る霊魂が、神の資格を得る機会を失ってしまうということ。

問六　傍線C「たちどころに癒えてけり」とあるが、そうなった理由を筆者(新井白石)はどのように考えているのか。次の中から最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① その役人は、神像の中に収められていたのがただの白い虫だと知ったことにより、自分の精神の力のほうが、そのようなものの霊力より勝っていると考えることができたから。

② その役人は、神像の腹の箱の中にいた白い虫こそが、その邪教の神官たちが神の力の本体として霊力を授けたものだと見破り、彼らにかけられた呪縛を解くことができたから。

③ その役人は、神像の腹の箱の中にいた白い虫をやっとの思いで捕まえ、油で煎て完全に殺すことで、その霊力を今度こそ封じ込められたと、ようやく信じることができたから。

④ その役人は、神像の中に収められていたただの白い虫がその邪教の神の霊力の根元だと思い込むことにより、それまで感じていた恐怖心を辛うじて克服することができたから。

問七　本文で述べている内容に合致するものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① もとよりあわびに霊力などあるはずもないのに、村人たちは、霊験がなくなってからも、病が癒えたのはそのお陰だと頑なに信じ続けた。

② 芦浦の地を通り過ぎる旅人が、次々にわらぐつを木の枝に掛け、幾百幾千とそれが重なったのは、古武士の霊に関する迷信が発端だった。

③ 邪教の霊廟を打ち壊すために派遣された下級役人は、その祭神に奏上するための公文書を書き上げると、たちまち両足が萎えてしまった。

④ 僧侶や道士、神官・巫女などは、自分の仕える神仏の力を高めるために、その像の中に霊力のある虫や蛇などを入れることがあるようだ。

問八　新井白石の著作として適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 万の文反古　② 花月草紙　③ 折たく柴の記　④ 英草紙

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（返り点・送り仮名を省いた箇所がある）

魯君聞顔闔得道之人也、使人以幣先焉。顔闔守閭、鹿布之衣而自飯牛。魯君之使者至。顔闔自対之。使者曰、「此顔闔家邪。」顔闔対曰、「此闔之家。」使者致幣。顔闔対曰、恐聽繆而遺使者罪。不若審之。使者還反審之。復来、求之、則不得已。世之人主、多以富貴驕得道之人。其不相知、豈不悲哉。

（『呂氏春秋』より）

（注）魯君 ―― 春秋時代の君主、魯の哀公。
顔闔 ―― 魯の賢人。
守閭 ―― 粗末な家に住む。
鹿布之衣 ―― 粗末な衣服。
幣 ―― 贈り物。

問一　傍線a「也」と傍線b「不若」の読み方として、それぞれ最も適切なものを、次の中から一つずつ選び出して、その番号をマークせよ。

①　なり　　②　や　　③　か　　④　かな

⑤　ごとからず　　⑥　しかず　　⑦　わからず

問二　傍線A「使人以幣先焉」を書き下し文にすると「人ヲシテ幣ヲ以テ先ダタシム」となる。この書き下し文に即して、原文に返り点と送り仮名をつけよ。

問三　傍線B「顔闔対曰」の発言は、どこまでか。その箇所の最後の四文字を、次の中から一つ選び出し、その番号をマークせよ。

①　遣使者罪　　②　不若審之　　③　還反審之　　④　則不得已

問四　傍線C「豈不悲哉」を口語訳せよ。

問五　この文章の趣旨として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

①　君主から評価される賢人は、世間からもその生き方が尊敬されるものだ。

②　賢人は君主の命令を堅実に果たすことを常に求めているものだ。

③　賢人も権力と富を持つ君主の招聘を断る際には、躊躇するものだ。

④　賢人というものは富貴に左右されず、確固たる人生を歩むものだ。